



ドイツ・犬物語 ⑦

「国境を越えての野良犬救出作戦」

好評連載
第7弾!

友人の誕生パーティーにあるカップルが犬連れでやって来た。犬の名前はハンナ、中型のメスの雑種だ。撫でるとゴロリと横になりやがてお腹をさらけだした無防備な格好で寝息をたて始めた。初対面の私に何の警戒心も持っていない。人を疑うことを知らない幸せな人生を歩んで来たのだろうか?と思いきや、4ヶ月ほど前までギリシャで野良犬だったというのだ。安心しきって眠るハンナの寝顔から、野良犬だったとはとても想像できない。それにしてもギリシャの野良犬がなぜベルリンに?実は南ヨーロッパの野良犬や捨て犬を保護しドイツに住む里親に紹介する動物愛護団体がドイツにはいくつかあるのだ。ドイツ各地にある動物ホームにも里親が現れるのを待っている犬はたくさんいるのに、なぜわざわざ外国から犬を「輸入」するのだろうか?

『野良犬たちの希望』という名の愛護団体の設立メンバーであるマリオン・ザウアービアーさんに話を聞いた。2004年、彼女がオリンピック開催直前のギリシャで休暇を過ごしたのが活動を始めるきっかけとなった。その頃ギリシャ当局は世界中から観光客がやって来る前に街を清潔にしようと、野良犬の姿を路上から消すことに躍起になっていた。保健所職員が犬を捕獲して檻に押し込むところを何度か目撃したし毒入りの餌を撒いて野良犬を殺すという話も聞いた。彼女の目には普通の市民も犬を大切にしているように見えなかった。テッサロニキで、応援するサッカーチームが負けた腹いせにファンが犬にガソリンをかけて火をつけるという、とんでもない場面に遭遇した。その犬が敵のユニフォームと同じ白黒の模様だ、というのが理由だったらしい。炎天下で鎖につながれたままの犬、杖で叩かれる犬…。

16年前私が初めてギリシャのザキントス島に行ったとき、野良犬が多くて驚いたことを思い出した。群れをなしていてレストランやホテルの周辺に餌をあさりにきた。ひどい皮膚病にかかっている犬、交通事故にあったのか足を引きずっている犬、片目がつぶれている犬などがいて、思わず胸がしめつけられた。餌をやるうとして一緒にいたドイツ人たちに引き止められた。「夏の観光シーズンが終わればレストランは閉まり、どっちみち殆どの犬は飢え死にするのだ。いま餌をやってもそれは君の気休めでしかなく、犬を助けることにはならないのだよ」と。それから私は犬を見ても見ないふりをした。卑怯だが、この犬たちを本当に助けることはできないと思ったからだ。しかしザウアービアーさんたちはそう考えなかった。「犬の世界に国境はありません、ドイツにいる犬だけ大切に、国境の向こう側にいる犬のことは知らん顔なんて人間の勝手です。ドイツ人はよく地中海で休暇を過ごすのだから、その犬の現状に目をつぶってはいけません」。



現在ギリシャの二都市に同団体の協力者がいて、処分される前に犬を施設から引き取ったり、獣医や近隣の人たちから寄せられた情報をもとに野良犬や捨て犬を保護したりしている。それからの手続きはドイツ国内での里親譲渡とあまり違いはない。EU(欧州連合)加盟諸国内の移動なので動物検疫も必要ない。ただし犬たちだけで飛行機に乗るわけにいかないので、空輸の随行者が必要になる。ギリシャで休暇を過ごす人たちにボランティアを依頼するのだが、志願者があまりいないらしい。また、ドイツに来てからも地中海特有の病気にかかっていないかの検査を怠ってはならない。アナ・レーネンバッハさんは子供の頃犬を飼っていたので、いつかまた犬を飼おうとときどき里親募集の犬をインターネットで探していて、偶然『野良犬たちの希望』のホームページでレオを見つけた。スポーツ好きな自分と一緒にジョギングしてくれる元気な犬というのが条件の一つだった。性格の記述を読んで自分との相性もよさそう。たまたまベルリンで一時預かりされていたので、すぐその家庭を訪ねた。ところがレオは写真より薄汚い感じで、半年たっても里親が見つからないという。「本当にこの犬でいいのかしら?」。散々迷った挙げ句、やっぱり引き取ることにした。生後6ヶ月ぐらいの時、アテネの路上で保護された。路上生活時代に嫌な経験をしたからか、今でも人怖じをするし他の犬に対して攻撃的になることがある。一人にされるのも大嫌いで、吠えたり泣いたり、ドアをかじったこともあるという。アナさんの所に来て2年半になるが、今もときどき犬の訓練校に通っている。「はっきりいってかなり手がかかる犬だけど、レオのいない生活はもう考えられない」とアナさん。保護されていなければ今も野良犬だったかもしれないレオ。国境を越えて2人が出会えて、本当によかった。



毎日のジョギングだけでなく、休暇もアナさんのお供をするレオ

ハンナやレオのように幸せになれた犬はよいけれど、今もまだまだギリシャには野良犬が多い。だからザウアービアーさんたちは「ドイツ人の価値観を押し付けないよう気をつけながら」現地での啓蒙活動にも力をいれている。たしかに社会が犬とどう付き合ってきたのか、その歴史と文化は尊重しなければならない。犬を巡っての、実は深い国際文化論的考察が必要なのだ。

池永 記代美 (ベルリン在住)